

日本災害看護学会JSDN / 第48号 2024年 12月 1日

【事務局】日本災害看護学会事務局（株式会社ガリレオ学会業務情報センター）

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-1-4F TEL.03-5981-9824 FAX.03-5981-9852

http://www.jsdn.gr.jp/ e-mail : g034jsdn-mng@ml.gakkai.ne.jp

## 第26回年次大会を終えて

大会長 西上 あゆみ

第26回年次大会は「災害に強く、そして備えを」をテーマとして、開催させていただきました。8月31日からの現地開催については、台風10号の影響で中止となりましたが、9月24日～10月24日にオンデマンドで開催をすすめることができました。オンデマンド配信が開始されてから参加を決める方もあり、1366名の方に登録させていただきました。現地開催中に動画撮影を考えておりましたので、オンデマンド配信資料は発表者の方に動画を作成していただくことになり、多くのご負担をおかけしましたことを改めてお詫び申し上げます。

1月1日の能登半島地震の発生から学会からの企画はもちろんのこと、会員様からの発表もこの地震にかかわる内容がたくさん報告されました。1000名を越える多くの方が参加くださったことから皆様の関心の深さも伺うことができました。オンデマンドならではのことで多くの発表に触れていただくことができたのではないかと思います。まだまだ、被災地への支援は必要でありまますし、次年度の学会ではぜひ現地開催で引き続きご報告をうかがえることを願っております。

本年次大会は補助金のような支援がない中であり、運営に関して非常に心配をしながら進めてまいりましたが、多くの企業様や団体様よりご支援をいただきましたことにも改めてお礼を申し上げます。皆様の多大なご支援、ご協力のもとに学会を開催することができました。心より感謝を申し上げます。

## Study Tour in Suzuの開催 令和6年能登半島地震の現場に寄り添って

災害看護教育活動委員会 委員長 酒井 明子

災害看護教育活動委員会は、令和6年能登半島地震災害看護プロジェクトと連携し、能登半島地震スタディツアーを企画した。目的は、現地の視察と講演会を通して、被災地における課題を現場で学び合うことであった。参加者は、36名。正院地区における講演では、珠洲市の現状及び被災者支援活動を健康増進センター所長の三上豊子氏、当時の災害状況や避難所運営については正院公民館長小町康夫氏、正院町区長会長濱木満喜氏、発災後の対応や応急仮設住宅での活動については、民生委

員の瀬戸祐喜子氏が語った。日置地区では、日置公民館長の寺井一也氏が避難や避難所の実際、地域コミュニティに関わる課題について語った。

参加者のアンケート結果（回収率75.0%）では、「とても満足」が96%、「理解できた」が96%、「今後、セミナー内容が役立つ」は93%であった。自由記述内容には「生の声を聞くことができ熱量が伝わり、より自分ごととしてとらえることができた。顔の見える関係の構築が大事だと思った」「被災しながら現地で活動している人から聞く話は深く複雑な課題が山積みだ。何か支援したいと思う」などであった。今後のセミナー開催希望は、被災地への訪問ツアー形式が96.2%であり、現地開催の意義を感じた。

現在、9月に発生した奥能登豪雨の影響により、停電・断水・2次避難・仮設住宅入居年越しなどの生活問題が続いている。能登の皆様がもとの生活に戻る日はいつになるのだろうか。

## Study Tour in Suzuに参加して

会員 立垣 祐子

8月18日、お盆休みが終わって初めての予定が珠洲市に伺うことでした。私は、この企画案内のメールを拝見し、すぐに申し込みました。後で何うと、募集後、数日で募集定員が満たされたそうです。

能登では、2つの公民館で地元の方々から被災後の生活や思いを伺いました。講話からは、能登の地を愛しておられる気持ち、能登の地と生きるという覚悟と葛藤、それゆえ、復旧が進まないことへの苦悩が伝わってきました。そして、そのような状況で、コミュニティ再興のための公民館活動の再開や風化させないための情報発信など、できることを精一杯なさっているお姿にふれました。ある方は、「こうやって遠路、関心や興味を持って、能登に来てくださるだけでありがたい」と仰っていました。今回のスタディーツアーは、自身の立場でできることを考え、行動していたかを内省する機会となりました。そして、研究する、募金する、能登の物産品を買う、ニュースを見る等…能登から離れていてもできることを心がけて生活しようと強く思う機会となりました。



被災地域を歩く

最後になりますが、能登の人々に穏やかな日常が戻ることを祈念いたしますとともに、能登を訪れるという体験型の学びの機会を与えてくださった災害看護教育活動委員会、能登半島地震プロジェクトの委員の皆さまに心より感謝申し上げます。

## Topics 災害看護！「災害支援ナースの今」

組織会員委員会 委員 弘川 摩子

阪神・淡路大震災をきっかけに看護ボランティアとして日本看護協会の災害支援ナースの活動を継続してきた。その活動が認められ、令和6年4月より改正医療法により、「災害・感染症医療業務従事者」として位置付けられ、DMATやDPATと並んで医療機関に所属する災害支援ナースは国に登録・派遣について定められた。災害支援ナース養成研修は、令和5年より開始しているが、応募数は、非常に多い。やはり、コロナ感染症の体験や異常気象などによる被害が多くなり、看護職・看護管理者の関心が高くなっているように思う。

しかし、まだ4月に改定になったばかりであるため、市町村や他の団体などには知られていない。まず今進めていくのは、顔をつなげていくことだと考える。DMATや自治体で行われる災害訓練への参加や保健所との合同研修などの機会を作っていく。災害支援ナースは、「人々の生命と暮らしを守るための支援を実施する」ということを広く知ってもらい、日頃より地域に災害支援ナースがいることで安心につながるようになりたいものだ。ぜひ、災害支援ナースに登録をお願いします。

## Topics 災害看護！「赤十字の災害看護」

会員 谷岸 悦子

赤十字災害看護の定義は、国の内外における災害による人々の生命、健康生活への被害を最小限にとどめるために、災害看護に関する知識技術を適用し、他の人々と協同して災害サイクルすべてに関わる看護活動を展開することです。

赤十字災害看護の強みは、救護活動を役割とする病院と看護職の教育機関があり、日々の看護業務を行い、定期的に病院や赤十字ネットワークを活用して救護の研修・訓練を実施していることです。災害時は、日常を基盤に病院全職員、利用者・患者や地域が一体となり、災害救護活動を展開し支えることです。赤十字の理念である「人道。人間の生命と尊厳を護り、苦痛を取り除く」の意思が行動へ繋がるのではないのでしょうか。

被災者の力と健康と生活を踏まえて、被災者に関心を向けてシームレスな災害看護を創造し実践することは課題です。そのために災害救護活動で蓄積した経験知を引き継ぎ、検証し、時代の変化に対応した赤十字独自の災害看護の知識・技術を構築して行動し続けることは今後重要と考えます。

## Series委員会活動！ 社会貢献・広報委員会

社会貢献・広報委員会 委員長 立垣 祐子

社会貢献・広報委員会を紹介いたします。本委員会の大きな活動は3つあります。1つは、ホームページの保守・管理・運営です。現在、学会発足から初めてのホームページ全体のリニューアルを行っています。ぜひ、新しいホームページにもアクセスいただきたいと思います。2つ目は、ニューズレターの発刊です。現在は、年2回（6月と12月）に電子媒体で発行しています。3つ目は、年次大会における「市民公開講座」の企画・運営です。毎年、市民の方々に災害の備えや災害看護に関心を持っていただけるような企画を委員で話し合い、実施しています。学会活動の『見える化』を推進し、会員の皆様に、学会をより身近に感じていただけるように活動していきます。よろしく願いいたします。

## Series委員会活動！「COIマネジメント委員会」

COIマネジメント委員会 委員長 増野 園恵

COI（利益相反）マネジメント委員会は、2023年度より新たに設置された委員会です。日本災害看護学会は、災害看護学の発展を通じて人々の健康と生活に寄与することを目的としています。その活動の中で、産学連携は重要な役割を果たしますが、同時に利益相反（COI）の問題も発生する可能性があります。本委員会は、研究や活動が公正に行われるよう、COIの適切な管理と透明性の確保に努めることを目的としています。

具体的な活動として、利益相反の申告と管理に関する指針と運法方法の策定や更新、申告内容の審査を行っています。今後は、学会員に向けた研修会や講演等を開催し、COIに関する正しい理解を広めるとともに、学会員が安心して活動できる環境作りに貢献してまいります。

本学会のCOI管理に関して、お気づきの点やご要望などがありましたら委員会までお知らせください。学会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

【代議員選挙のお知らせ】

投票期間：令和7年1月10日（金）0時から  
1月24日（金）23時59分

## 編集後記

石川県能登地方において今年1月1日に発生した地震に続き、9月21日から23日にかけて豪雨が発生しました。ようやく新たな生活の基盤を作り出した方も多かったところであり、被害を受けた皆様に心よりお見舞いを申し上げます。今回のニューズレターでは、被災地の状況を実際に知る取り組みについて企画者と参加者双方からの報告があります。改正医療法での災害支援ナースの位置づけは更なる看護支援の後押しとなることが期待されます。日本災害看護学会年次大会は第26回を迎え、多くの知見が共有されました。学会設立の契機となった阪神淡路大震災は年明けに震災後30年を迎えます。現地を知ること、現地を想うこと、災害看護に携わる看護職の今までの一つ一つがこれからも確かな道につながりつづけますように。  
(社会貢献・広報委員会 委員 田村 康子)